

リバーフロント整備センターの現状と課題

座談会



出席者 ● 福岡捷二 東京工業大学助教授
松田芳夫 建設省河川局治水課長
(初代研究第一部長)
渡辺 浩 会計検査院
事務総長官房技術参事官
(前研究第一部長)
(司会) 白井顕一 研究第一部長

一白井 本日は大変お忙しいところお集まりいただきありがとうございます。

リバーフロント整備センターはこの9月1日で設立満5周年を迎えます。そこでこれまでを振り返るとともに今後のリバーフロント整備センターのありかたの参考とするため座談会を企画したものです。

それでは早速座談会を始めます。

まず、リバーフロント整備センター発足当時からシンボリックな事業である「ふるさとの川モデル事業」について話を伺いたいと思います。

私が一番感じていますのは、現在ふるさとの川モデル事業は指定件数が減って来ている状況ですけれども、それはそれとして当初のふるさとの川モデル事業の考え方と今は随分変わってきたと思うんです。当初、特に昭和62、63年のふるさとの川モデル事業の基本的な考え方というのはどんなところに力点を置いてやられたかというのを、お伺いしたいんですけど。

ふるさとの川モデル事業とセンター発足当初について

—松田 従来、河川事業というのは基本的には国主導型で、権限を都道府県に委譲したといっても、それは県どまりで市町村の参画する場が少ない。それまでも河川環境整備事業のように市町村が参加する事業もあるといいながら、高水敷にグラウンドを整備したり、公園をつくったりする付随的な仕事だけで、河川の整備に、主体性というとオーバーになりますけど、市町村が当事者性を持って参画できる場がなかった。

沿川の地元市町村にも応分の参加意識を持たせようというのが、ふるさとの川モデル事業の本質ですね。そうはいながらまだ試行錯誤の時代で、河川改修事業そのものを市町村にやってもらうというところまで、モデル事業とはいいながら踏ん切ることもできなかったのが、河川整備と並行して河川沿いの道路を、河川の景観や地元の人たちが川に近づきやすいように整備するとか、川沿いに公園をつくるとか、川と一体となった広場とかいったものを、同じ画の上で一緒にやろうということで、河川の改修にも市町村が何らかの意味で当事者として参画するという意識を持っていたが事業がふるさとの川モデル事業だということです。

リバーフロント整備センターが発足したとき、直轄事業ではスーパー堤防と流水保全水路事業、あと補助というか、地方向けの事業はふるさとの川モデル事業が業務の柱になっていたと思うんですね。

ですから、リバーフロント整備センターは市町村とつき

合う河川局の窓口だ、そういう感じでスタートしたので、市町村を一生懸命まき込んで河川の人も地元の市町村の人と一緒に話をしながら計画をまとめて、それぞれの役割を決めてやっていくというのが重点だったと思うんです。

ふるさとの川モデル事業の内容が、今5年たつと当初より変質していると、さっきちょっと言われたけれども、具体的にどういふふうに変質しているかはわからないが、最初の感じでは市町村の意見を聞きながら、何かそれらしい画を書いてあとはそれぞれの機関が分担してやっていくと。国や県の仕事と市町村の仕事、そんな感じでいたと思うんですけどね。

—白井 変質したというのは、ふるさとの川の1年目、2年目、指定を受けた川というのは、その画を見ると、どの川もほとんどが利用面が中心なんですね。今ふるさとの川をつくろうとすると、そっちの話だけでは、通用しない状況になっているんですね。

—松田 それは多自然型というか、もう少し自然っぽい川をつくるという話でしょう。

多分ふるさとの川モデル事業の画いている河川像というのが、どうもいじり過ぎではないかあるいは材料にやたらに石をつかったりして少し凝り過ぎるとか、非常にかたいという批判がある。自分でもそう思っているんだけど、最初のころの画というのは、大なり小なり地元の市町村が、ああいう雰囲気あきふまの絵を日頃から暖めていて、特に、札幌さっぽろの安春川なんていったら、ひんしゆくひんしゆくを買うほどの画だったんだけどね。間に入ったコンサルタントもいいと思っているし、札幌市自体がいいと思っていたんだね。だから、東京で見ている僕らの感覚と、地元の感覚というのは相当の差があったんだけど、地元がいいというものをこっちの感覚でやめろというわけにもいなくて、あの辺なんかは完全に妥協しちゃっているんですよ。皮肉なことに、今では大変、市民評判もよいそうです。

—白井 昔はまさにU字の側溝みたいなもんですよ。それに比べ、はるかによくなったというのは事実なんですよ。

—渡辺 私の時代も感じましたが、やっぱり地元の人が都会で見ているんですよ。河川敷にああいうものがあつた、こういうものがあつた。それを自分のところもつくりたいというのがベースにありましたね。

話題が事業の内容になってますが、基本的なふるさとの川モデル事業は、従来はつくりっぱなしで、利用もされな



松田建設省治水課長



渡辺会計検査院技術参事官

い、維持管理もされないというリバーフロアができる前の反省があって、初めに松田さんの言われたような点をものすごく強調した事業だったんじゃないですか。地元の人がこれを使うんですよ、維持管理も主体は地元なんですよ、そのためには委員会が終わっても引き続き協議会というものをつくってもら、とか、そういう仕掛けが入っていたんじゃないですか。それは今も多分変わらないはずだと思うんですね。内容は別として仕掛けは変わっていないんじゃないかな。

一白井 仕掛けは変わってないんですけども、その仕掛けが必ずしもうまく動いてないというのは地元の人をよくわかる。

一渡辺 全体の絵は夢だから結構大きく書いてると思うんですが、計画の中には資金計画みたいなのがありましたね。重点的にこの場所は5年でお互いにこれだけの予算を入れればできるんじゃないかという部分を取り出した、分担計画というのもつくることにしていたはずですよ。それがうまく機能してないから、何年たってもいまだにまとまってないという事業が目につくんじゃないですか。

話は変わりますが、発足当時の背景に、リバーフロント整備センターは直轄事業ではスーパー堤防と流水保全水路ぐらいしかやるなというような制約がありませんでしたか。

一松田 そういうマイナスの制約は感じなかったよ。やっぱりこれからは、河川事業といたって、国が一方向的にやっていくといっても、ファンもないし、もっと市町村と溶け込まなきゃいけないと。それがリバーフロント整備セン

ターの役目で、リバーフロント整備センターといえど、例えば工事実施基本計画を預かるとか、技術計算をやるとかというところじゃなくて、水辺の復権とか景観とかまちづくりとか考えようによれば応用動作だと。

だから、センターの名前もそう大きな名前じゃなくて、名前をつけるときに僕も少し口出したような記憶があるんだけど、何だか永続性のない名前のような気がしてね。だけど、従来のイメージを変えるためには、それはそれでいいのかなと思っていました。

一白井 当時リバーフロントじゃなくて……

一松田 当時ウォーターフロントって騒がれて非常にブームになった時代があるわけね。ウォーターフロントというと、これは福岡先生の方が詳しいんですけど、特にアメリカなんかで当時港が荒廃しているという話があって、大規模原材料の輸出入型の港湾なんていうのがみんなさびれちゃって、そこをレジャーだとか、あるいは人間が港湾に住むとかいった意味で港湾区域の再開発という話題が当時非常にぎやかで、ウォーターフロント再開発とかいう話があった。本当はウォーターフロントセンターみたいな名前をつけたかったらしいんだけど、運輸省との港湾問題での競合の問題なんかがあってできなかった。だからリバーフロントってかなりな造語になっているはずですよ。語源的にいけば、アメリカの文献の中でも1回か2回見たことがあるが。

一福岡 一番古いのが1917年かな。

一松田 ないわけじゃないんだろうけれど、日本ではそうポピュラーな単語じゃなかったよね。

話がいろいろ脱線するんだけど、市町村をできるだけ河川に関心を向けさせる財団だというふうに僕は理解したよ、少なくとも。センターの事業量も市からの仕事のシェアは結構大きいですよ。これは、ふるさとの川のあらわれなんだろうけどね。

一白井 話はまた少し変わりますが、一つお聞きしたいのは、いろんな解釈の仕方があるんですけども、国からの仕事のシェアがふえるのはいいことだという人と、それはやっぱりよくないんじゃないかという2つあるんですよ。本当に地方の末端まで入り込んで、ある意味でそこを啓発するような格好でやるべきだという声もあるんですけどね。その辺はどう考えられますか。

一渡辺 私は全く松田さんとは違う理解をしたものだから、(笑声) そこで変わったのかもしれない。

私が引き継いだときは市の仕事の単位が小さかったんですよ。端的に言えば1件200万円だとか、そういうのがものすごく目についたんですよ。これはもうとてもやっていけないと。

とにかく大きい仕事を取りたいからということが、結果的に国の方へシフトしていったということなんです。

一松田 それは仕事の、能率とかを考えるとそうかもしれないけれど、僕らの最初に参画したころは、やっぱり市町村の窓口だという意気込みが随分あったね。だから、変な話だけど、財団が豊かになればセンターの身銭を切っても財政力のない市町村とつき合うという精神で、そういう市町村から委託を受ければ100万円もらっても1000万円分の仕事をしてあげようという感じで、コスト割れになるけど、(笑声)今まで河川なんて縁がなかった村や町の人とも話ができるということは面白い、面白いと。

福島県の西白河の泉崎村の村長とつき合って、たしか100万円か200万円の仕事もらって、「手抜きは許さん」とか説教されたりね、(笑声)それが結構えらい新鮮味があった。

一渡辺 たしかに、100万円、200万円でもものすごく手かけてましたね。

あまり採算を気にしないで相当エネルギーを使ってやっておられましたですね。

一松田 福岡先生は、リバーフロント整備センターの発足をどういうイメージで受けとめられました、最初。

一福岡 今の発足の話しとか、意気込み、よくわかったような気がします。ふるさとの川モデル事業の仕事は、概ねうまくいっていると思います。リバーフロント整備センターはうまくところに目をつけ、仕事を始めたなかねがね感じていたところです。それには幾つか理由があります。

第1点は、リバーフロント整備センター職員のトレーニングが十分されていない時代に、新しい課題で比較的やりやすいことから手をつけられたのは、良かったと思います。ものすごいことをやろうということじゃなくて、まず手造りのいろんな試みをやってみようということで、最初の1、2年はセンターの絶好のトレーニングになり、皆がこの仕事を通じて多くのことを学んだことです。その蓄積が現在生きているのです。

第2点は、時代の背景を受けて、コンサルタントもこの事業で勉強できたということですね。みんなあたりまえの話として川づくり議論ができるようになったのは、このふ



福岡東工大助教授

るさとの川モデル事業が契機のように思います。

3番目は、私共に直接関係があるのですが、各地域の先生たちがこの事業の委員活動を通じて治水事業へのかかわりというか、治水事業の意味を体験し、河川技術者と一体感を持てるようになったことです。市町村の人と知り合えるようになったとか、若い先生がふるさとの川モデル事業を介していろいろ教わったということは非常に大きなことで、私達にとっても大変な財産になりました。

その中で、水理の専門家だけじゃなくて、河川と少しつながりを持っている土木の先生に、川というものが町づくりの中でどんな役割をするのか、つまり川からみて一体的な町の整備という目で沿川の構造をどう考えるべきかということに関心と理解を持ってもらったと思います、これはリバーフロント整備センターにとってよかったです。だけでなく、地域に密着した川づくりを考えてみるという点でも重要な役割を果たしてきたと思います。ですから、その当時のリバフロの職員の心意気は、高いものがありましたね。最近の状況を見ると、ふるさとの川モデル事業はリバーフロント整備センターでは、かなりマイナーな仕事になっているように感じますがね。

ただ、最初から全部市町村とコンサルタントでやるというのではなくて、市町村が国や県の指導を受けながら、緊密な関係を持っていって川づくりをしていくことが今必要であり、このためにもリバーフロント整備センターが窓口的な役割も含めて事業の裏方をつとめるというのは大事なことだと思いますね。

ふるさとの川モデル事業によって、地域づくりの中の川というものが、ある程度位置づけられたんでしょね。地域のシンボリックな河川をふるさとの川に指定してきましたが、それ以前にはどの程度力を入れてその川の整備を進めてきたかをみると、市町村や県は、そんなに力を入れていなかった川もみられます。改めてふるさとの川モデル事業に指定されたということが起爆剤になって、多くの人がそういう目で川を見るようになり、町づくりと一体的に整備しようとした。そういう動機づけを与えた意義は大きかったですね。

一松田 今ではふるさとの川モデル事業は累計で141河川になっているでしょう。

ことし本省で議論があつてね、ふるさとの川モデル事業はぼちぼち使命を果たしたのかなと。モデル事業というんだから、そろそろ看板塗りがえころじゃないのという話があつて、大体141といえど一つの県平均で3つだもんね。

僕らのときも予算確保の限界は知ってたから、みんなでいいものをつくるという意志統一が大事で、あと個々の予算になれば、リバフロが画を書いたからって直ちに道路事業費や公園事業費がついてくるというものじゃない。例えば必要な事業費の積算をしても、それはまたそれで予算を獲得するには別の努力が必要だというわけで、自治体の人もわかってくれた人はわかってたと思うけど……。

熱心なところもあつて、行政の分野までリバフロが口出したら、いまだに仲よくつき合っている人がいるんだけど、「うるさい、財団は黙れ！」と言われてね。(笑声) 行政の分野にリバフロの人間が口出しするなというわけで、今思うと皆の熱心さの現れだったんだ。そういう意味では本当にありがたい。

一福岡 市町村は、ふるさとの川モデル事業の精神は、わかっていたんでしょけど、川の持っている本来的な怖さなんかを意識しないで、見た目にいい川づくりに一生懸命であつたということもありますね。これについては事務局であるリバーフロント整備センターにもある程度問題があつて、治水上問題のあるところは、もう少し考えたらどうかというふうなところまで、事務局として勉強して、議論して欲しいところもありましたね。最終的には計画は委員会がたてるのでしょけれども、この問題は、今後もリバーフロント整備センターにとって重要な問題であると思います。

一松田 さっきふるさとの川モデル事業の最初のころの絵



白井研究第一部長

がかたいという話があつたけど、今考えると近自然工法とかいう議論というのは、ちょうどリバフロが発足して2年目のテーマだったですね。最初は、景観とか、親水とか、都市計画とか、市街地とマッチした川であるとか、何かそっちの方からスタートして、自然とか、生態にやさしいとかいう話は2年目か3年目のテーマだったと思う。

それから、文化の問題になるんですけど、われわれ日本人は石積み、石垣みたいなのが好きなんですよね。だから、護岸がみんな石垣になっちゃうんですよ。本当に好きだなと思って。僕の知っている範囲では、最初のふるさとの川モデル事業で今の近自然型というものもあるにはあつた。鶴生田川かな。

一渡辺 藤沢の引地川も。

一松田 やっぱ、ふるさとの川は一時代市町村との対話ということで口火を切ったけど、若干最近マンネリ的になってきて、マンネリというわけでもないか。市町村の熱意とか、そういう雰囲気引きずっていくにはぼちぼち限界がきたんじゃないか。違う切り口が求められる時期になってきたんですかね。

スーパー堤防について

一白井 話題を変えます。

現在、リバフロの主な事業の柱というのは、スーパー堤防、それから多自然型川づくり、大きく言えばその2つになるかと思います。多自然の中に、今年から魚の上りやすい川づくりというのが始まっていますけれども、それは多

自然型川づくりの中に含めていいんじゃないかと思いますので、大きく分けて2つの流れで現在やっているという状況です。

今後一体どうなるんだろうかというのがあるんですけども、スーパー堤防について、土木屋なり、河川屋としてこういう視点でスーパー堤防の事業を進めるべきじゃないかというのがあれば、福岡先生、一言。

一福岡 私はいろいろ機会をみつけて学生にスーパー堤防の話をしています。学生はこれに強い関心を持ちますね。河川事業が息の長い壮大な事業であるということもあるんですけど、町づくりと一体的にやれる、今の沿川の環境の悪い災害の受けやすい構造を良くしたいというのは、土木を勉強している者の多くがそう思うんですが、そういったものにフィットする事業なんですね。リバーフロント整備センターがこれを一つの大きな柱にして調査研究をやられているというのは私は大変素晴らしいことだと思っています。ただ、スーパー堤防は延々と盛土をする事業であるという感覚を多くの人々に持たせ過ぎたんじゃないかと感じています。

実際にどんな物が出来上がるのかということも並行して考え、表現し、出来上がる街をイメージさせるようなところに具体的に突っ込んでほしいと思います。構造の議論や土地に関わるいろいろな難しい問題をどうのように調整クリアするかということはもちろん大切ですが、そればかりやっていくと本来仲間になってくれる他の分野の人がなかなか入って来れない心配があります。

具体的にはスーパー堤防上を越流することがあるということは、その上に作られる街としてはどんなものが考えられるかをそろそろ考えてほしいと思いますね。

スーパー堤防の技術論は河川局、リバーフロント整備センターの得意なところですから勉強すればよいものができると思うんですが、やはり、都市部局、道路部局も含めて仕事をしていくということは、その辺の共通のイメージが作られて良い時期にきています。

具体的にいろいろな絵を書いて、多くの人に議論してもらう。河川の側からだけの議論じゃなくて、都市などの側からの議論をもらえるような準備に入ってほしいなあというのがスーパー堤防の議論が始まって数年経過した現在強く意識されます。何もまだそこまで行く段階ではないと言わないで、それをやって、また構造や法律、制度論に戻るとか、それからまた日常的な住みやすさとか、交通の利便

性、ある程度生活するためにはどんな道路づくりをするのかという議論に入りながら、徐々に焦点を絞って問題点を明確化していく。

どうも、スーパー堤防事業を進めるにあたって、クリアすべきものは何と何と何という制度論の検討に力を取られ過ぎていているように思います。並行してやるべきものは幾らあってもいいんじゃないでしょうか。そうするとまた、多くの人が参加したいという気になります。

今はどちらかといえばプロの世界の議論になっていて、ほとんどの人がなかなか議論に参加できない。急に議論に加わってもよく理解できない。問題の大きさが異なるため比較するのに適当かどうか分かりませんが多くの人と一緒にやって成功したふるさとの川モデル事業の域に議論が達していないという見方もできますね。

一松田 スーパー堤防というのは、概念が整理されない段階で議論を始めたからいろいろ困難なことも多かった。ただ、リバフロを何のためにつくったかという最初の議論で一つ忘れていたのが、河川と都市局とが一緒になって何かやりたいという部分がもう一つあったのね。福岡先生に挙げていただいた大学の先生たちともつき合えるようになった、コンサルタントもあった。もう一つ河川局と都市局の合同でつくったセンターなんですよ。リバーフロント整備センターは。

職員の配量からも正々堂々とタッグプレーになっているだから、河川の計画論としてのスーパー堤防の考えが整理されない段階でリバーフロントの目玉商品だという話だった。ただ最初は、何やっていいかわからないというようなところが確かにあったと思うんですね。

でも、今度骨組みができたので、逆にスーパーをやっていく具体の事例をリバフロで議論してもらってもいいんじゃないの、いろんな人に参画してもらって。今までは何かスーパー堤防の、どちらかという一般論というか、基本論が、中心だったと思うけど、具体の地区でのスーパー堤防の計画を最近やってるんですか。

一白井 色々な地区で河川だけでなく、都市計画の関係者地元の人達とも計画づくりを進めています。計画は一応できんですが結局最後は都市事業などの河川以外の事業との展開とどのように合わせて行くのかというあたりでなかなか完全なコンセンサスが得にくい状況です。

一渡辺 区画整理事業についての知識というんでしょうか自分らでやったことがないもんだから、細かいところまで

いくとフォローし切れない。もう少し基礎的なことをやらなければいけないだろうと思うんです。区画整理事業は実際どういうところにノウハウがあって、この具体の事業計画には、このノウハウでいけるんだとかいう提案をするほどのレベルにないまま、進めてきたということなんだろうかな。

—白井 区画整理事業の手法と河川事業の手法は全然違いますから、河川サイドが区画整理のやり方についても、もう少し勉強する必要があると思います。

—福岡 それはそうだろうと思います。大いにやっていただきたい。

スーパー堤防事業は何でやるのかを考えたときに、今のような堤防で超過的な規模の洪水が生じたときに、氾濫水がこのように流れてくる。そんな状況になったら低地で怖いから、やっぱり環境のいい、しかも再開発していい街をつくらうということから、スーパー堤防をやろうということがあったんだろうと思うんです。世の中に向ってそれしか言っていないわけです。

堤防の形や、制度・法律の話しただけじゃなくて、もっともっと現象としてこういうものが起こるから、こういうふうにしたらどうかというものがそろそろ出てこない、多くの人を仲間に巻き込めない。構造をどうするかというのは、もう自分らの中の議論であって越流したときの強度がどうだというのは、これも勉強すればいい話なんです。もっと一般に裾野が広がるような議論のやり方を準備する時期にきていると思っているわけです。

実際、そういう目で見ると、やるべき事はものすごくあるんです。1つのことがクリアできたから次の問題はこれですということではなくて、やっぱり並行して進むのがよく、それぞれの問題の中で都市サイド、道路サイドということも議論できる共通の場ができれば良いと思っている。

リバーフロント整備センターの今後について

—渡辺 なかなかうまく行かないというのはリバーフロント整備センターの体制の整備というか、あり方みたいなのところと連動しているような気がする。従来はとにかく受託業務をこなしていくことが大部分で、ふるさとの川モデル事業に代表されるようなやり方でこれたんですが、ことスーパー堤防は、それじゃだめなんですよ、多分。

—福岡 だめですね。

—渡辺 研究そのもの、そういうものが片やにないと進ま

ないんじゃないかなという気がしますね。

—白井 確におっしゃるとおりだと思いますけどね。ただ、今のリバーフロント整備センターは忙しすぎて本当に余裕がない。この先どうするかを考えるセクションをつくってやっていかないと、将来大きな問題を多分起こすんじゃないか。

—渡辺 ことスーパー堤防に関しては、今先生がおっしゃったようなテーマは幾らでもあるんだから、リバフロは自主的にどんどんやってくれるだろうと外部からは思われている。

—福岡 今の話、同感ですね。というのは、別にこれはリバーフロント整備センターだけの問題じゃないんですよ。あらゆるセンターがそうなんですけどね。

建設省の組織は、例えば河川局に治水課がある、それから土木研究所がある、各センターがある、その他応援団体である建設業界や、コンサルタントがあります。いろんなことを考え、こういうことをやったらいい、ああやったらいいというアイデアを出す集団は多いんです。だけど、本当にそれを実行するための技術は、だれが与えるのかとなると、現状ではないのではないのか。

大きな問題の中のパーツの技術の開発を担当する所はあります。パーツの技術があるところまでいったときに、そのパーツの技術を総合化していくところがどこかということです。それは、センターの役割ではないかと思います。

本省、あるいは地方建設局は、こういうことが大事だと、素早く世の中の動き、重要性を認識して、施策を打ち出す。それに必要なパーツがある程度できたのを見きわめ、河川局とリバーフロント整備センター等がその状況を見て、土木研究所等にも入ってもらって、各地方建設局などにその成果を現場で試してもらいながら、さらにデータを集めて、それを技術として体系化するというか、蓄積していく。これがセンターの重要な役割なのでしょう。

ところが残念ながら、どのセンターもなかなかその体制をとれていない。だからアドバルーンは上がるんですが、技術的な裏づけが伴っていない。時間をかければ、それぞれがみんな優秀な集団ですから、できていくことはあるんですけども、いつも先に結論のような何かがあって、それを支えるべき技術の蓄積が不十分なゆえに、ふわふわしていつちやう。これが河川がかかえる今の技術の課題なんです。

センターには、長期的に考えてやるべきものと、毎日毎

日やることと両方の仕事があると思うんです。長期的にやることについては、及び腰に見えます。長期的課題についてしっかり基礎研究も含めてやらなきゃならないのに、どちらかというと、そっちの方は、あまり一生懸命ではない。自分のところに技術がそれほどないのであれば、これやれといわれたら、つらいに決まってるわけですよ。

センターは、川が非常に大事という時代の要請に応えられるように組織の整備が求められます。リバーフロント整備センターがふるさとの川モデル事業であれば、着実にみんな喜んで仕事ができる段階には一応到着したけれども、もう少しステップアップするために、どうやって体制を整えて技術の蓄積を図れるようにするか、能力をつくっていくかということが課題だろうと思うんですよ。

一松田 今の先生の話は、耳が痛いほどよくわかるんだけど、この河川なら河川の基本的技術を体系化して整理していくという思想は国土開発技術研究センターのテーマであったと思います。

ですから、私らが今あるいろいろな研究課題をお願いするときも、河川や治水の計画論の基本にかかわることは一般的に国土開発技術研究センターにお願いしており、応用動作というソフト的な話題はどっちかというとリバフロにお願いしているような感じがありましてね。あるいは従来の計画の主流をなしてなかった話、今後出てくると思われる、例えば自然生態の問題だとか、自然と人工のバランスをどう取っていくとか、そういう話が何かリバフロのフィールドなのかなという感じがする。

それを言うと、じゃスーパー堤防をどこでやるんだっていう話になるんですけど、その場合リバフロの性格づけの中で、スーパー堤防というと、都市局と河川局と一緒に仕事をしていくキーワードの1つという感じがしますが。

最近、似たようなセンターや財団が沢山あるから、みんな競争でやりやいいという単純明快な話もあるんですけど、それぞれ特色ある財団の性格を生かしながらどう住み分けていくかが話題になっているんです。

一福岡 リバーフロント整備センターは、リバーフロントに関するものなら何をやってもいいんじゃないでしょうか。リバーフロントに関する基礎的な問題は幾らでもあります。もちろん生態系もそうだし、水辺の整備もみんなそうですよ。それらについてセンターとしての技術の蓄積の仕方が、まだまだ不十分であるような気がするんです。リバーフロント整備センターがそういったものについて勉強し、努力

して技術力を上げる体制をどうやってつくっていくのか。その辺がこれから重要になってくるんです。

一白井 おっしゃるとおりです。

だから、いかに蓄積をさせようかと中で非常に苦労してるんですけど、難しいなあというのが実感です。

一福岡 例えば、センターが事務局になっている樹木管理の検討会などの成果は、センターの実績だと思うんです。今はやりの生態や魚の勉強からのスタートでは目的がはっきりしていないと言えるでしょう。それは魚の上がる魚道も大事だし、生態を考慮した川づくりというのも大事ですけども、もっともっと基本的に河道計画論の中で、魚や生態などの切り口でみれば幾らでもやれる重要な問題があるはずです。余りにも行政の直接的なテーマに入り過ぎちゃって、それが大部分になり過ぎている。河道計画について、生態とか、景観という切り口を今までのものに抜け落ちていた点を加えるならいいんですが、もともとの基本を十分勉強しないで、生態や魚について勉強するというんじゃない、長持ちした議論はできないのではないのでしょうか。

一白井 端的に言いますと、リバフロというのはいろんな材料があると。その材料をかき集めて料理するのは得意なんです。その材料が本当にいいのかどうかを吟味するのが不得手なんです。

それともう一つ、新しい料理のメニューをつくらうたって、どうもそこまで手が回らない。ただ、じゃ材料の吟味というのは、いろんな切り口があって、いろんな方向から切って材料を吟味せにやいかんですけど、リバフロとしてはどこまでやるべきかというのが必ずしも明快でない。

一福岡 それがまずいと思うんです。どこをやってもいいのです。本当に技術をちゃんと蓄積する所までいってればそれを更に進めるべきであって、それが確かな技術の蓄積になる。お互いに共有できるということまでやらないと、リバーフロント整備センターのシェアはここです、役割はこうですと自らを律する限りにおいては、そこまでいけないんじゃないでしょうか。

一渡辺 先生のおっしゃるとおり、ものすごく期待もいただいているし、答えなきゃならない。一方で、稼がなきゃならないという宿命があると。そうすると、それを解決する方法は、ルーチンの部分と、基礎的な勉強する部分のバランスをどう取るかなんです。調査手法の開発という部門をセンターの中に組織上きちっとしないんだめだと思うんです。その部門がある程度、ルーチンワークにつながる

ような調査手法なりを最初に勉強する。ふるさととはそうやったんですよ、先代たちは。それを受けて今やっている。一松田 アメリカ流に言えば財団というからには、何百万ドルかの基金を持っていて、その基金の運用益で10人や20人の研究員を遊ばしておけると。これが本来のインスティテューションだと思うんだけど。そうは言いながら、まだ財政基盤がない中で役所から出向してもらったり、民間から来てもらったりという中で、本来の意味のシンクタンクみたいなあり方というのは、理想は理想としてなかなか難しいし、そこに滞在する人も、本当だったら5年ぐらいいてもらった方が一番いいんだろうが、2年サイクル、ひどいときは1年サイクルで交替しているという話じゃ、なかなか安定的に思想や技術も継承されないし、頭が痛いところだよ、ここは。

私のお願いとして、リバーフロント整備センターができたときの大きな目的に河川を話題にして市町村の方々とつき合うあるいは、地方の学識経験者の方とか、河川以外の人とつき合う場とかいうのも一つ大事な話だから、それは今後も続けていってほしい。

それから、もうすこし河川や治水の本来のことに理解があって、なおかつ町づくりだとか、景観だとか、環境問題を議論できるコンサルを育ててほしい。

一福岡 リバーフロント整備センターがこの5年間で何を中心にやってきて、どんな成果が上がって来たのかを整理する必要があります。ふるさとの川モデル事業もそうですし、スーパー堤防絡みの蓄積もあるし、基礎的研究もたくさんありますよね。稼ぐというのは私も絶対必要と思いますが、これまでの成果をもう少し敷衍して行って、その技術をさらにいろいろなことに使えるような方向づけを是非やっていただきたい。

リバーフロント整備センターが確かな技術を持っていて、次の技術にどうしてもそれが必要になったときには、その中のものを、さらに拡大生産して行って応用力の高い技術にしていく、そういうことを義務づけられていると思うんですよ。

それはリバーフロント整備センターが全部やるんじゃなくて、外の人たちをみんなシンパに巻き込めるようなテーマをつくり、技術が伴わないうちは情報を出して、できるだけ多くの人と一緒に考えていけるような土俵をつくる、それもリバーフロント整備センターの役割だと思います。

幸いに、今時代がリバーフロント整備センターが向いている方向を向いているから、方向づけをやる絶好の機会です。いま、世の中では環境、環境といっているけれど、例えば多自然型川づくりの中で、今までがっちりしたコンクリートでやっていたものが別のものに代替えするとなると、即、今度は技術の裏付けが問題になります。コンクリートで施工しているうちは大きな技術的問題はなかったわけです。率直に言って。だけど、ここにきて多くの人が、素人も、玄人も環境にやさしい技術を声高にいうようになって来ました。そのときに、玄人の技術力が試されるのです。一般の人の言うことを、「うんそうです。しかし、そのためにはこういう技術を用いて川をこういうふうにしなければ、それは実行できません。」といえなければなりません。だから、生態だ、魚だとか、多自然だというけれど、結局は再び技術の時代が戻ってきたんですよ。そのところを十分認識していなきゃ、リバーフロント整備センターの仕事は苦しい、他のセンターもそうですけれど、とくにリバーフロント整備センターの仕事は、ソフト的で今までとは違う分野での活躍を求められています。これを実行するには本当の技術の裏付けが必要です。多自然型川づくりは、まさに技術そのものが問われているのですよ。

ちょっと恰好よ過ぎることを言ったかもわからないけども、多自然なんていったら技術論ですよ、もはや。

一松田 そうですね、まさに目からうろこが落ちる思いで。コンクリートブロックと矢板でやっているときはそんなに技術が要らない。

一福岡 かなりそうなんですよ。力任せのやり方でよかった。だけど今度は力を使えなくなったときに技術が問われているわけですよ。

一松田 これはいい結論だな。

一白井 どうやらリバーフロント整備センターは今後どうあるべきかについて答えが出たようなのでこの辺で座談会をお開きにしたいと思います。

最後に、今後ともリバーフロント整備センターに対しご支援、ご指導をよろしくお願い致します。

本日は大変ありがとうございました。

(本稿は、平成4年7月24日に「リバーフロント整備センターの現状と課題」と題して行われた座談会の一部を編集部責任により編集したものです。)